

- ・賑やかなステンドグラスのごとき色まといて寝ねん微熱のあれば 鈴木 玲子
- ・鴨が居て鯉が居てあはれ亀が居てありがたう秋は暮れてゆくなり 山本 陽子
- ・黒板がいちばんきれいな六組に黒板を消す係りのをらず 関沢由紀子
- ・「乾杯」のわが誕生日九月十九日テレビに爆撃死の人間映る 鳥山 順子
- ・八咫烏らしき鳥が柿の木のまだ熟れやらぬ実を見張りをり 百瀬 来順
- ・少しづつ施設に馴染み眠るらし姉に会ふこと今はかなはず 佐々木智子
- ・閑散としたるゴールに到着し手に渡さるるご褒美の飴 牧島 康子
- ・濃紺の東シナ海に切り込める大瀬崎上に灯台は立つ 西野 國陽
- ・韓国語英語中国語聞き分けて進むきんきらきんの御座船 松元 雅子

海上の雲になりたし

本田一弘

- ・海上の雲になりたし輝ける海にわが影落としゆくかも 水野 利顕

・海風の涼しき港の水面を水切りのごとく跳ねてゆく魚

海上の雲になりたしと詠んだ一首目。スケールの大きな発想から生まれた歌で気持ちがいい。二首目は爽快で躍動感がある。

「港」「水切り」の「み」、「ごとく跳ねてゆく」の「く」といった音の重なりがリズムカル。「水面」「水切り」、そして「水野」さんという作者の名前が効いている。

・トーストがキツネの色に焼き上がり秋のキッチンまだ薄暗い 伊井かずひろ
・フィルターにゆったり細い湯を注ぎ秋の太陽ゆっくり昇る

一首目、キツネ色という言葉はあるが、「キツネの色」とした途端に、リアルな「キツネ」の姿が立ち上がってきて一首全体に不思議な雰囲気を出す。助詞「の」の効果は抜群。二首目、コーヒーを淹れるゆったりとした時間が浮かび上がる。ゆっくり昇る太陽との対比がいい。

・頼るのが苦手なままに母となり震えながら立つ一本の木 齋賀 万智
・湯船には今日のいいねを浮かべおり吾子と一緒に水をさわって

子どもを産んだからといって誰もがぐさま強い母になれるわけではない。はじめて母になった戸惑いが独特の感性で詠まれた一連である。自分を一本の木に喩えた一首目。「震えながら」に作者の不安感がにじみ出る。二首目は子どもと一緒に日々を生きていることを実感している喜びが詠まれる。焦ることなく、「今日のいいね」を積み重ねることが子育てなのだろう。

・ばらばらと、粉々、散り散り 適切ないまのころの状態はどれ 清水 晴架
・ひび割れたところで上を向いたならやさしく満ちる月と目が合う

今の「こころ」の状態に、やるせない思いを抱いている主体。何とかそれを言葉に、歌にしようともがき苦しんでいることがリアルに伝わってくる二首である。

やわらかき焰 横山未来子

- ・やわらかき焰に薪を投げ入れて音たつころの冬鳥の声 高 鸞石
- ・這い蹲って撮る君の花小さくて小さいな